一点線

VOL.6

卒業生特集号!

一点鎖線

お，お待たせしましたっ！
一点鎖線6号です。生田支部の総合雑誌，
ほとんど全部の人が参加しています。
みなさんに その時のベストを出してもらいました。
一人ひとりの様々な想いをそこに孕んで，そう，
今，ここにあるこの本です。
開いてみて下さい，さあ，どうぞ。

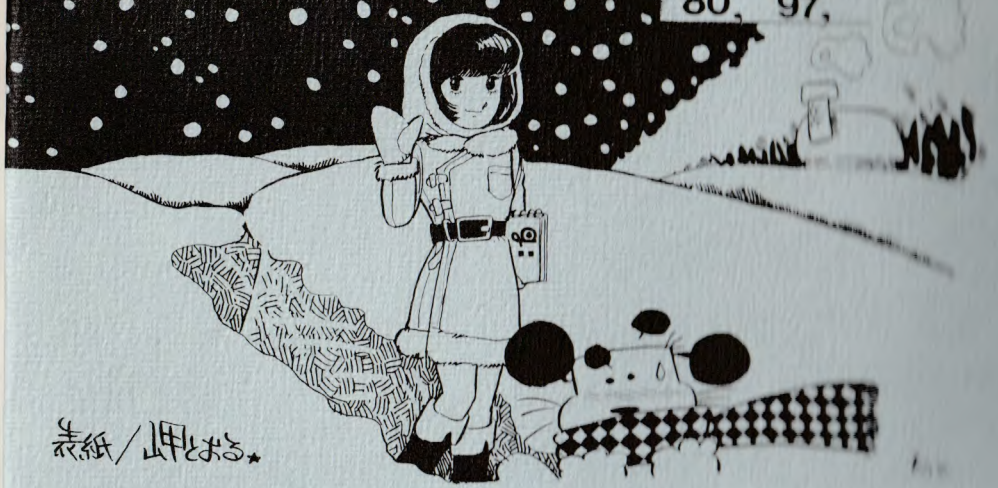
1980. 10/26

左手 なおゆき

MSFC.

★★★ 卒業生特集 (くわしいことは めにゅう(24)) (23.)

★終笛(オルフェ)の詩 〔安井豊文〕 2,
★国民総背番号制の恐怖 〔砂防会館二郎〕 6,
★宇宙市民 〔宝積宣至〕 8,
★ピゥサイコ・エンジニア 〔古都 環〕 18,
★MY-SHARONA 〔Asami〕 55,
★不思議なラジオ 〔竹内理恵〕 63,
★漂流 〔黒色こしょう〕 68,
★据膳狐狸 〔三鬼亮輔〕 71,
★冬の雪の精 〔さとみ裕子〕 76,
★カタ・ウォル 〔左手なおゆき〕 78,
★流刑者の神話 〔澄城晴花〕 81,
★こちらK-9(番外編) 〔荻野恵子〕 85,
★ボタ雪姫 〔阿陀貞宏〕 91,
●生図を騒がせた7つ事件 5, 17, 62, 70, 80, 97,



表紙／山田とおる★

終笛（オルフェ）の詩

安井豊文

終笛（オルフェ）の詩

その男は貨物船の下級船員だった。うらぶれた感じの、よれよれの服装で、船乗りの特徴である帽子をかぶっていた。その目はもの静かな茶の色をたたえ、哀し気ではあったが、夢を追い求める男の目をしていた。

男は背後を振り返った。宇宙港は静まり返っていた。わずかにライトが点滅し、その存在を表示しているだけだ。港はその星の繁栄度の1つの基準だ。

ここは銀河辺境星区の恒星系、第2番惑星にある唯一の宇宙港。この星は貧しい星だった。外界との接触もあまり行われずたまに貨物輸送船が立ち寄る程度だった。

男はさまざまな港をみてきた。中には目を見張る程、華やかな港もあった。ひっきりなしに船が離着陸し、宇宙港は色々な星区の人間の坩堝となり、繁華街へ行くと賑やかな饗宴が繰り広げられていたものだった。スペースマン達はそこで旅の疲れを癒やし、再び宇宙へ向けて飛び立つのだった。

彼もやはりそういった所で楽しんでは星から星へとび回った。だが心から楽しむ気にはなれなかった。妻と娘が彼の帰りを待っていたからだ。彼はもうずぶん長い間帰っていなかった。

男は酒場で飲みながら昔のことを思い出していた。カプセルを開き、2人の写真をみつめる。

「もうすぐ帰るぞ。長かったなあ、本当に。」

「それは奥さんと娘さんですか。」とその店の主人がいった。

「ああ、もう10年も会ってない。娘もずいぶん大きくなったことだろう。」と男は懐かしさで顔をほころばせながら、しばらくその写真をみつめた。

「だんな、帰るんですかい。」

「ああ。今の雑用がすんだらな。後はまっすぐ2人の所さ。ずいぶん待たせたからな。

まったく10年もよく宇宙をうろつき回ったもんだ。」

「いやあ、あたしもこの身体さえ不自由じゃなかったら、今でも宇宙へ行きたいですなあ。」

彼にもう一杯出してやりながら

「この星でも若い連中はみんな宇宙へ飛び出しちまって、ただでさえはじっこの星区にあるってのにもう静かなもんですわ。危険とわかっていても飛び出さずにはおれないってとこですかね。」

「ああ、……そうだな。」酒を置きながらそう答えた。

彼は店を出ると、しばらくその辺をうろついた。思いにふけっていた。10年前あいつはオレが出ていくのを泣いて止めたっけなあ。だがオレの気持ちをどうしても変えられないと知ると、一言、早く帰ってきてと言って、オレを送り出した。

オレもしばらくはあいつに連絡をよこしていたが、会社との最初の契約が切れて、オレが相談もなしで再契約を結んじまったと知ると連絡も途絶えちまった。

まだおこっているだろうか。……

静まり返った通りを疲り街角を曲がった。そこに貧しい身なりをした娘が立って花を売っていた。

「花はいかが。」
娘は大きな湖のような瞳で彼をみつめながら彼にいった。彼の娘と同じ位の年頃だった。男は、愕然として娘をじっとみつめ、かごに入った花をみつめてからいった。
「こんな時間まで花売りかい。」
娘は大きな瞳で見つめ返していた。
「きれいな花だな。全部くれるかい。」
娘の瞳が輝いた。まるで少女の顔全体が花開いた様だった。
彼は金を出した。
「こんなにいらないわ。」
「いいんだよ。」
娘は彼をじっとみつめていった。
「でも。」
「いや、オレにもキミ位の娘がいてね。」
彼をみつめる娘の瞳がなごむ。
「じゃ、お礼に夢をみせてあげるわ。」
といった。
「そうよ、あなたのみたい夢をみれるわ。」
男は苦笑した。大人びた子だ。黙っているぶんには、年相応にみえるが、態度や話し方は一人前の女だ。
「では、みせてもらうとするか。」

娘は一輪の黒い花を取り出し彼の目の前に差し出した。
「これをみて、強く思うのよ。」
その瞬間、その黒い花が目前で白く光り、爆発した。幾億、幾兆もの光点、星雲、大宇宙、彼は渡り歩く、星々の間を。その眺めは圧倒せんばかりの美しさ広大さだった。これこそが彼の愛してやまぬ世界だった。
一瞬にして我に帰った。
「どうだった。」
「ああ……」ため息のような声
「素晴らしい夢だったよ。」
男の瞳は夢みるようにうっろだった。
「ありがとう。」と言って男は歩いていった。
娘はその背中をいつまでも見つめていた。
「待ってくれるさ、もう少し位、待っていてくれる。」男はそうつぶやきながら、自然と港の方へ足が向いていた。
翌日、男は飛び立っていった。

娘は、ある日このことを母親に言った。母親は「その人は船乗りの例の帽子をかぶっていたのかい。」と言った。
「ええ、そうよ。」
「そうかい。」母親は静かにそう言った。
「あの人には娘がいるそうよ、私くらいの。帰るんですって。」
「そう言ったのかい。」と母親は素っ気なく言った。
「どういう意味。」
「男達は一度宇宙へ飛び出したら、死ぬまで帰ってきやしないのさ。戻ってきてもまたすぐ行っちまうんだよ。」
母親の顔には、悲しみとあきらめが、深く刻まれていた。
〝あの人もそうだった。〟母親は思った。

数日後、男の乗った貨物船宙船は大事故を起こし、乗員は全員死亡した。

泥酔!! 相模女子大門前事件。

生田を騒がせた人の事件・①

「合コンを申し込みに行く」
岬さんがやおら立ち上がった。夏の初め。男数人が集まってシケた顔で飲んでいた時の事である。回りの男たちはああまたいつもの座興かと思って別段気にも止めず部屋を出た岬さんの胸にはいつ決意とホワイトの瓶が一本しっかりと抱かれていた。
生田から電車で三十分かぬてよりこにある。よろける足で道を辿りつ目を付けていた相模女子大がそってある。女子大の門に着いた。夜の七時半。門は閉まっている。岬さんは途方に暮れ、あたり前でありたかせこの芝生の上に寝転何を思ってしまった。次の朝、門番がこの人に起こされて帰って来たと言う訳のわからないような怖しい話。

国民総背番号制の恐怖

砂防会館
三木助

「そうだ、君がカードを持って行こうと行くまいと、君が自然に君のカードの数字が減る。昔は物と物を買う時には、お金を持ってこれば物が買えないんだ。」

「君がカードを持って行くまいと、君が自然に君のカードの数字が減る。昔は物と物を買う時には、お金を持ってこれば物が買えないんだ。」

「物だけでなく、お金も同じことで、相手が困るだろう。お金を不便だからと、それに名前を入れる分けには物物を交換できるものだ。」

「物だけでなく、お金も同じことで、相手が困るだろう。お金を不便だからと、それに名前を入れる分けには物物を交換できるものだ。」

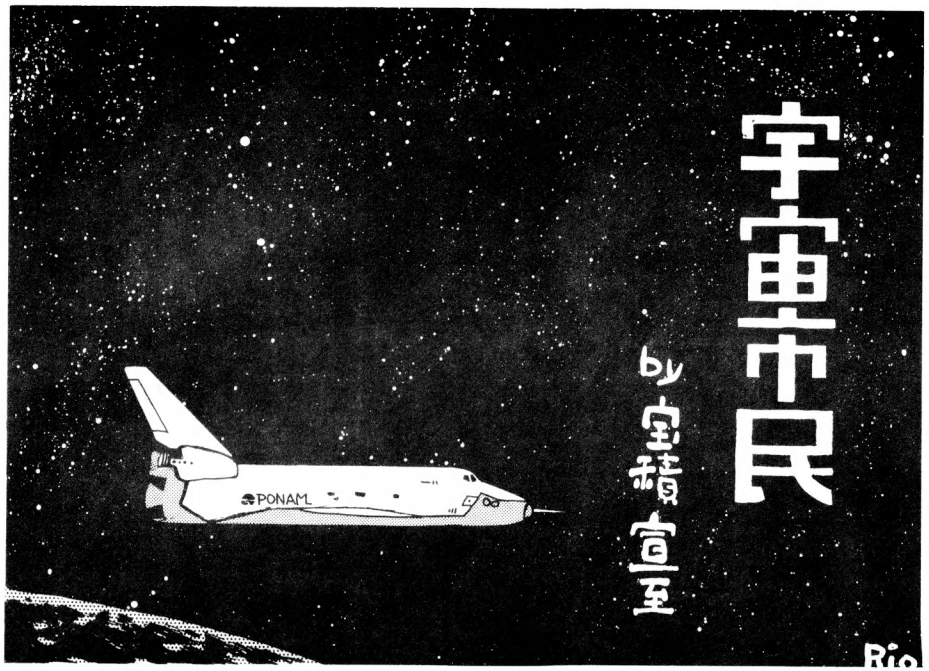
「そうだ、君がカードを持って行こうと行くまいと、君が自然に君のカードの数字が減る。昔は物と物を買う時には、お金を持ってこれば物が買えないんだ。」

「そうだ、君がカードを持って行こうと行くまいと、君が自然に君のカードの数字が減る。昔は物と物を買う時には、お金を持ってこれば物が買えないんだ。」

「なぁ、なんなんだ、この沢山の物は。」

「なぁ、なんなんだ、この沢山の物は。」

「なぁ、なんなんだ、この沢山の物は



オービタ客室内前部の壁に据え付けられたカウンターは、三分前である。

とられた宇宙連絡室の移住座席の今を示すカウンター。発射台に取り付けられた「ペルセウス」は、宇宙へ向かう座席として、ロケットに乗っている。

彼は、今、「ペルセウス」の宇宙連絡室に移住している。

月に行くのは、一九八〇年四月に宇宙へ向かうのは、シャトルのスペースコロニーの移住である。それは、NASAの初宇宙飛行実験計画の最終目標である。

成功以来、ロケットが零になった瞬間、SMRBへブースターエンジン（ロケットモーター）と二基のSMRBへブースターエンジンが、ゆっくりと背後から襲いかかる。

凄まじい音響が、三千トンの強大な推力放出に耐えながら、最大重力三Gの負荷に耐えている。

外から連絡船をながめていると、地球のような目にしてはいるが、彼をシートにめりこませ、身体を全体で感じるのは、人間そのものだろう。

彼は、この時、ほぼ引力に滅入りそうになる。

心臓が、激しく全身に血を送っている。

呼吸するのも苦しい。全身が、動かない。

彼は、このカに逆らって、窓の方へ首を回すのは、仕事だった。回した瞬間、チラッとSRBへブースターロケット）が、切り離されて離れていくのが見えた。

耳にはいろいろな噴射音が、続いている。

残っている先程までの凄まじい耳なりが、静まりかえった。

今度は、彼をシートにめりこませていた目に見えない神の手も消えた。

小さな衝撃が、後部から先程とは、打って変わってきた。RCS（ロケット）の点火なのだろう。

彼は、軌道変換シャトルは、思った。

さらに、宇宙の深みへ駆け上がっていく。

さらに、姿勢制御が、行なわれた。シャトルの四十八個の小型ロケットによって行なわれる。彼は、その間じゅう、窓から外をながめていた。まるで地球が、彼を中心にして回転しているような浮揚感を感じた。

そして、「ペルセウス」は、下部を地表に向けて、今、惰円軌道をすべるように音もなく滑空していく。

宇宙には、空気もない。もし、移動しているのを確かめる対象物もなければ、自分が、動いているのか浮んでいるのかさえわからない。

今も、凄まじい速度滑空しているのに、まるで、ぽっんと浮んでいるように見えるだろう。

彼は、窓の上部に目を移した。

そこには、満天の空に、星が、はるかかなたきもせずちりばめられている。

千年の昔ナイルの岸辺で空を見上げ、ナイルの氾濫を予知するために、天空の星をひとつひとつ数えていった時があった。

あれがオリオン、そしてシリウス。

宇宙人々から星を数えて以来、古代エジプトの守護人からは想像もつかない場所から、ひとつひとつ星を確かめるかのように数えていった。

第二段階の軌道変更が、行なわれ、連絡船は、今、高度一〇〇〇kmの赤道上空にあるシャトルパーキングステーションに目ざして、今、円軌道にはいった。

柔かいチャイムとともに、客室内前部のスピーカーからアナウンスが流れてきた。

「今、高度千キロの円軌道にはいりました。あと、一〇分でパーキングステーションIとランデブーいたします。ベルトは、締めたままでそのままおすわりください。」

なお、二時間後に皆様方の最終目的地『アルビレオ・シティー』に向けて特別〇TVが、出発いたします。所要時間は、三十六時間の予定です。」

柔かいチャイムとともにアナウンスは、終わった。

『アルビレオ』白鳥座のβ星。銀河を背景に夏の大三角の内部に位置する星。

『まったく、地球の土地、人の名の次は、星座の名か。もう少し考えればいいのに。』

と、彼は思った。

昔から、各国は、天体の名をできうる限り自国の名をつけたいという競争を続けてきた。宇宙都市については、一国の少なくとも十ヶ国以上で建設することはなかった。常に、第三者の介入により、星座の名付けには、一騒動があった。

彼は、ひとおり見渡したのちに、そのあいてある椅子にすわった。彼は、前の方にあるモニターTVに目をやった。

太平洋にはえ、見えるモニターTVは、生ふ台風のうずまき、赤道あたりで発ふ気付く。彼は、窓が、見えていると、外を見る。窓が、一つもない。

彼は、モニターTVに目を向けた。太平洋は、海。宇宙がたくさんの雲。

上に、青い星。地上の姿。

だ、別のモニターに、地球。

広がっていたのだ。

ラ、そのとき、超高感度のカメラ。

そのとき、最初に、移住思いんだ。

いしだよ。

底意。

たビ。

そのあった。

ルビレオ。

ラグ。

ラ、シティー。

ンジェー。

正三角形の頂点に位置する点に建設される。この点では、月と地球の引力が作用し合って、物体をそこに閉じ込め働きをもつ。アルビレオ地点は、この地点に建設されたシリンダー状の中に、大気や、地上を作り、土を敷き詰め、宇宙空間に、一つの人類の生活の場を建設し、農業を作り、工場をもち、ビルを作げ、三番目に、「アルビレオ」と呼ばれる位置に建設された。

この点では、月の中であり、シリンダルの引力によって、西側を作り始めて、十ヶ月以上、建造されたシリンダー状の中に、全体はまるで、十年という歳月を要した。

全体は、直径六キロ、長さ三十三キロ、内部は、巨大な、もだ。

一方、対軸にて、完成してい、居住区と、地面を、円柱状で、住所は、地面をもって、六等分した、三ケ所。

キロ、ニ、軸をとり、回転して、一Gの人工重力を発生させている。そのほとんどを月と小惑星から集めた。全部で五万トンも必要であった。

なくとも十ヶ国以上で建設していたから、一騒動があったが、それは、何気無しに、ことに決定された。

ちょっと、警告ブザーとともに、赤いランプが、燈った。

彼が、加えられ始めた。

勢い、船体全体に、ドッキングトラス運動が、船体全体に、ドッキングトラス

ニ十分後、連絡通路は、連絡通路に、通路口は、通路口は、カ、ショ、カ、ロ、ビ、ー、ロ、ビ、ー、ビ、ー、ビ、ー

彼は、そのポスターを見た瞬間に、俺は、ここにいかなければならないと悟り、すぐ、手続きに行った。そして、今、あの時の背景の星空を、今、彼は、宇宙で見ている。

ふと気付くと、リチャードは、誰かの視線を感じた。見ると、隣りにひとりの女性が、座っていた。彼女は、じっとこちらを見つめている。彼女は、言った。

"何を考えてらっしゃるの？"

リチャードは、彼女の方は振り返らず、モニターTVをうしろに見つめながら答えた。

"いや、何でもありません。つまらないことです。"

"別れてきた女性のこと。"

"まあ、そんな所です。"

そう言い終って、リチャードは、彼女の方を振り向いた。

そこには、年は、二十七から三十歳ぐらい、髪は、栗色、色の白い白人女性が座っていた。

"すみません。突然こんなこと尋ねて。私、アンナ・フィッシャーと言います。あなたも、アルビレオへ？"

"ええ、リチャード・ケインです。リチャードと呼んでください。フィッシャーさん。ひとりで移住なさるんですか？"

"アンナでいいです。ええ、ひとりです。"

リチャードは、また、うつろに画面をみつめた。アンナもまた、画面をぼんやりみつめた。

リチャードが突然言った。

"アンナ、君は、なぜ移住することにしたんだ。"

"新しい人生を始めたいから。"

"なるほど、希望に満ちあふれているわけか。しかし、本当にそれだけかな？"

すると、アンナの顔が少し暗った。そして、少しうなだれてしまった。リチャードは、言った。

"そうか、わかった。アンナ、僕は、あの地上の映像を見てると何か感じるんだ。本当に、こうして見てると、人間の存在がどういうものかわかるような気がするんだ。それは、一言でいうことができる。ふさな存在だ。しかし、それにも一生がある。それが、どういう意味を持つんだろう。"

それから、二人は、一言もしゃべらず

にモニターをぼんやり見つづけていた。

……

二時間後、二人は、「アルビレオ」行き特別OTVに乗っていた。OTVは地球低軌道から月や宇宙都市間を結ぶ連絡船である。低推力だが、かなりのペイロードも輸送することができるためかなり便利なものである。

二人は、並んでシートに座った。これから三十六時間座り続けるわけである。

二人は、その間じゅう、ぽつぽつと話し始めた。話題の中心は、なんとなくこれからアルビレオに行くアンナは、自分の地球でのいろいろ話題だった。彼女は、捨てられ医師で生活についてもだった。そして、恋人がいても話っていたが、移住する決心をしたあり、それを忘れるために、リチャードは、自分のことについてはあまり語らなかった。

二人は、「アルビレオ」の安全性について話していた。アンナが、言った。

"リチャード、本当に危険は、ないと思うの？"

"ほとんどないね。外壁は、三重にして

あり，γ線や高速粒子でさえつらぬくことができない．気密性は，そのため非常にいい…，生命維持システムや循環システムにしてもサブシステムを二重に取り付けてある．隕石と太陽フレアによる放射線の危険もレーダーと太陽面監視衛星とコンピューターの連動によって，ただちに処置をとることができる．危険度は，0.09％しかない．

"リチャード，いやに詳しいのね．まるで作ったみたい．"

彼は少し顔色が変った．

"い，いや，少し本を読んだだけだよ．"

アンナは何かあると思ったが，聞かなかった．

そして三十六時間後，「アルビレオ」にあと二十分でランデブーする地点まできていた．「アルビレオ・シティー」が前方に全景を見せていた．

それは昔から夢想していた宇宙都市のイメージとはかけはなれていた．それは，まさしく宇宙に浮かぶシリンダーであった．

それがゆっくりと回転している．優雅に宇宙を回っている．

OTVの乗客のすべてが，その動きとその全景に魅せられている．OTVは，シリンダーの軸にそってゆっくりその北極にあたる部分を目ざして進んでいく．

今，「アルビレオ」は，光を取り入れる鏡をオープンの状態にしている．それは，一種のおおいで，一方の端に固定された長方形の鏡で夜や危険の迫った時，閉じるようになっている．

アンナも食いいるように見つめている．よく見ると窓の中に陸地を形成している部分が見える．陸地の上にくねくねくねった帯状のものが見える．川だ．さらに，地上の上の方に白いものが浮んでいる．雲らしい．

アンナは言った．

"あれは，雲だわ．宇宙に雲が，浮かんでいるなんて昔の人は，信じられなかったでしょうね．"

リチャードが，何も言わないので，アンナは，リチャードの方を振り返った．すると，リチャードは，「アルビレオ」なんかうわの空でぼんやりと前を見ている．

"なぜ見ないの？"

アンナは，尋ねた．リチャードは，ちら，と窓の外を見て，またぼんやりと前に目を返した．そして，ぽつりと言った．

"みたくないのさ．"

"なぜ"

リチャードは答えない．アンナは，また尋ねた．

"そういえば，リチャード，あなた，自分の過去についてあまり話してくれなかったわね．"

"気が向いたら話すよ．"

"今，話してよ．"

アンナは，じっとリチャードを見続けた．そして，リチャードは，諦めたかのように言った．

"わかったよ，じゃ，言おう．あの「アルビレオ・シティー」は，僕が，設計したんだ．"

"どういうこと？"

"僕は，以前，NASAの宇宙都市開発本部のスタッフだったんだ．宇宙都市の計画には最初から参加していたんだ．一号の時も設計スタッフの補助をしていた．アルビレオ・シティーについては，基本設計から取りくんだんだ，しかし……"

"しかし？"

"今，言えることはこれだけだよ．あとはいいたくない．"

・・・・

OTVは，「アルビレオ」とドッキングした．

ここは，軸の中心方向にそっているため無重力エリアである．ここには，この無重力の特性を利用して工業区，医薬開発セクションや通信区などがあった．さらに，その工業セクションを囲むように農業区の五十五個の環状ステーションが連絡通路を通してつながっている．

二人は，OTVを出て，ドッキングセクションを通り移民局に出頭し手続きを済ませるとあちこち見学に出かけた．

二人は，最後に居住区の中にあった公園区に来た．

そこは，静かな森と湖と滝，そして，動物が，放し飼いにされてあった．まだ移民者が少ないと見えて公園区にはまばらにしか人がいなかった．

二人は，森をぬけて小さな竜と川の見える広場に出た．一面に芝が植えられていた．滝は，異な角度で落下していた．

アンナは、リチャードと少し丘のような高丘の地面に座った。今、昼ごろであった。光は、暖かく、竜や小鳥の声が聞こえてきた。

アンナは、この美しさに魅せられた。

"これが、全部あなたの設計したものなのね。すばらしいわ。"

"いや、自然のものにはかなわないさ。すべて人工のものだから。地球から運んだものや月からのを利用したにすぎない。"

と、リチャードは、吐きすてるように言った。

"ところで、もう二度と設計の仕事はしないの？"

"もうできないさ。"

リチャードは、言った。

"それどういう意味？"

"さっきの話の続きになるが、「アルビオン」の設計のあと、新型の宇宙船の設計をすることになったんだ。それが、完成し、飛行実験になって事故が起こり五人死んだ。一人は友人だった。設計段階でミスが発見されたんだ。僕は、その責任をとって辞表を書いた。あれは、すべて僕の責任なんだ。僕さえそのミスを見つけていたら……"

リチャードは、そう言いながら頭を手でかかえこんでしまった。

アンナは、何もいえなかった。そして、彼女は、今わかった。彼が、どれだけその仕事にうちこんでいたか、設計という恋人にふられたのだということを。

アンナは、つぶやいた。

"人生なんてよく似てるわね。あなたも私も新しい人生をやり直すためにここへきた。わたしたちって、もしかしたら気が合いそうね。"

"そうかな。"

"人生にやぶれた者どうしってこと。"

☆ ☆

もう、影が、長くなってきた。夕ぐれが近づいてきたのだ。二人は、動こうとしない。

アンナは、言った。

"ここ、夜は星も見えないのね。"

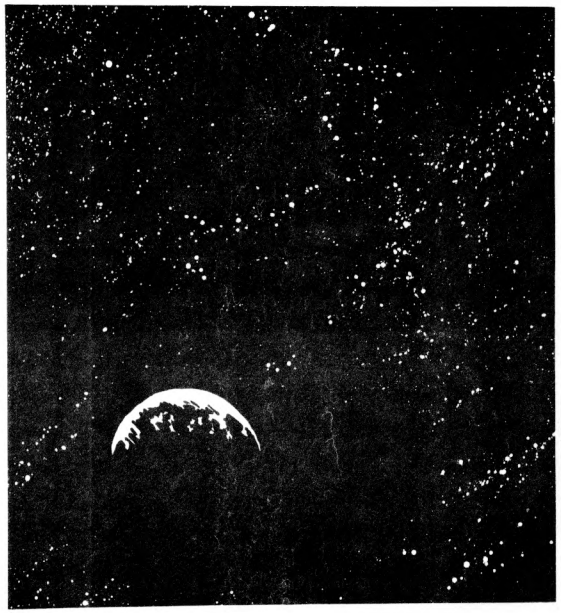
"そうだよ。"

"つまんないの。でも、いつまでも真っ暗じゃだめね。あしたの朝、ブラインドを開けて太陽の光が、はいってくるようにしないと。"

リチャードは、ハッとしたが、何も言わなかった。アンナのいいたいことは、痛いほどわかった。そして、ポツリと言った。

"それが、人間の生き方だね。"

そして、あたりは、暗闇になった。しかし、次の日の朝には、光が、満たされるようになるだろう。



生図を騒がせた「事件」②

涙の新宿"寒い"事件

◀24ページへつづく

事件は五十二年の暮れもおし迫った頃、十二月の授業も終わりS戸研恒例のコンパ終了後の深夜に起った。二次会は新宿でと一行は生田駅より電車に乗り込んだ。この時、竹下氏は翌朝の新幹線で故郷福岡へ帰る予定で帰省荷物持参で参加した。車内で氏のカバンは千原氏の席のわきに置かれたが、新宿駅改札口を通った時千原氏の手にカバンはなかった。この時新宿駅は終電間近で混んでおりすぐ全員が集まれない状態が悲劇の発端となった。一行の乗ってきた電車はすぐに下りの最終となるため千原氏はホームにかけ戻った。しかしカバンは深谷大先輩の手に握られていた。こうなると返ってこない人間の事など知ったこっちゃない。一行は深夜の街へと足どりも軽やかにくり出して行った。